

水曜通信 19

2019年
1月

東北学院大学研究ブランディング事業通信
「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」

第19回水曜礼拝（公開大学礼拝） 2019年1月16日（水） 18:30-19:00



説教：出村 みや子（本学教授）

奏楽：小野 なおみ（本学礼拝オルガニスト）

<礼拝次第>

前 奏：J.S.バッハ

「日にして光なるキリストよ」BWV1096

讃美歌：244番「行けどもゆけども」

聖 書：ルカ福音書 24章 28-35節

讃美歌：326番「ひかりにあゆめよ」

説 教：「もう日も傾いて」

祈 禱

頌 栄：544番「あまつみたみも」

後 奏：J.S.バッハ

「おお主よ心より汝を愛しまつる」BWV1115

後奏の後、40分間の松岡多恵（東京藝術大学大学院博士課程）・森翔悟（東京藝術大学大学院修士課程修了）の独唱・重唱による賛美を行ないます。

次回第20回水曜礼拝は2月20日です。

第18回 水曜礼拝報告（説教：長島 慎二、奏楽：小野 なおみ）

2018年12月19日(水) 18:30-19:00

讃美歌：39番「日くれて四方はくらく」
聖書：マタイによる福音書 25章31-40節
讃美歌：讃美歌21 200番「小さいひつじが」
説教：100番「生けるもの凡て」
頌栄：「小さい者の一人」



【説教要旨】

周囲の人たちから白い眼で見られる重度の精神薄弱児であった兄を通してキリストと出会ったわたしは、自分が憎んでいた者が、兄を白い眼で見る人たちなのではなく、自分自身であったことを知りました。キリストが教える、「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」との御言葉の意味は、この最も小さい者の一人をキリストであると考えようということではなく、まさしくキリストであるということです。この御言葉によって、兄が、わたしの前に現れたキリストであったことを悟りました。いま、クリスマスを待つ者にとって、二千年前にベツレヘムの馬小屋で生まれた赤ん坊こそ、わたしたちの主キリストであることを覚えないものです。

(長島慎二)

前奏：J.マンスフィールド「一輪のバラ咲き出でて」
後奏：J.ブヴァール「プレス地方のノエル」

前奏の「一輪のバラ咲き出でて」は、讃美歌96番「エッセイの根より」の原曲であるドイツコラールをテーマとした曲です。讃美歌同様、優しく穏やかな曲調で、救い主の誕生を待ち望む様子が表現されています。後奏の「プレス地方のノエル」は、フランスに古くから伝わるクリスマスのメロディーをフランスのオルガニスト、ジャン・ブヴァールがアレンジした曲です。



(小野なおみ)

礼拝とその後の19時00分から30分までのグリークラブ・キャロラズ・宗教部聖歌隊による賛美に45名（グリークラブ・キャロラズ・宗教部聖歌隊の12人を除く）の市民が参加されました。

礼拝後、グリークラブ・キャロラズ・宗教部聖歌隊による賛美



今回はグリークラブ・キャロラズ・聖歌隊の3部合同で賛美をさせていただきました。曲目は「ああベツレヘムよ」「神のみ子は今宵しも」「海原を越えてきし」「あら野のはてに」の4曲で、デイスカントや独唱ありの演奏をしました。

(宗教部聖歌隊3年 服部セラフ)

“FAITHFUL UNTO DEATH” (2)

「金子謹三とホーイとの出会い」

金子謹三は、幕末の1865年に岩手県花巻市（当時は里川口村）に金子家の五男として生まれました。18歳で兄たちと同じ慶応義塾に入社しますが、その後、大蔵省勤務の長兄弥平がニューヨークに赴任するにあたって一緒に渡米し、フランクリン・



金子兄弟(右から二人目が謹三)



若き日のホーイ

アンド・マーシャル大学（以下、「F & M大学」と表記）付属のアカデミーに入学します。そこで謹三が出会ったのは、F & M大学を卒業し、隣接するランカスター神学校の最上級に在学中のホーイでした。ホーイはすでに日本伝道を志しており、新来の日本人青年に特別な関心をもったとしても不思議ではありません。ホーイは謹三のために英語聖書の講義を行い、語学と信仰の両方の手引きを行いました。謹三はホーイの期待どおりに翌年（1885年）の4月には信仰を告白してクリスチャンとなります。金子謹三は、ホーイが最初に信仰に導いた日本人となったのです。（続く）

（東北学院史資料センター 日野哲）

ジョン・ラファージとは誰？ (1/2)

我が東北学院の土樋キャンパスにある礼拝堂（ラーハウザー記念東北学院礼拝堂）は1932年の献堂で、そのなかにロンドンのヒートン・バトラー・アンド・バイン工房制作の「昇天」を描いたステンドグラスがあります。

しかし、なぜプロテスタントの礼拝堂がゴシック様式で、さらにそこにゴシックで成立したステンドグラスもあるのか？

これは院長がシュネーダー先生の時代でした。シュネーダー先生には、録音もされている有名な説教「我は福音を恥とせず」があります。これは福音の原点のパウロ主義です。キリスト教世界



ジョン・ラファージ『魚と花』1890年頃
ボストン美術館 Photograph ©
Museum of Fine Arts, Boston



ジョン・ラファージ
1860年頃

におけるゴシック復興も日本趣味（ジャポニスム）もまた原点帰帰でした。そこでアメリカにおけるステンドグラス復興とジャポニスムの先駆者ジョン・ラファージ（1835-1910）です。彼は1886年に日光にも来て大感激しています。また仏教の不可知論も知っていました。彼の作品は有名なティファニー社のステンドグラスに受け継がれます。

我が学院のステンドグラスを研究することは、身近なジャポニスムの研究にも繋がってくるのです。（鐸木道剛）

— ランカスター神学校での発見（４）—

「大阪市立聾啞学校と高橋 潔」



シュネーダーを“終生の師”と仰ぐ卒業生の一人に高橋潔という人物がいます。高橋は、東北学院在学中に礼拝を通して讚美歌の美しさに触れ、声楽の勉強のためにフランス留学を志しますが、経済的理由のために断念します。高橋は、「日本で幸せの少ない人のために尽くしなさい」とのシュネーダーの言葉を胸に、一生を音の世界から遮断された人のために捧げようと決意して、大阪の盲啞学校（後に盲者と聾啞者の学校に分離）の教師になりました。

ランカスターには、高橋が校長在任中の1936(昭和11)年の大阪市立聾啞学校の卒業アルバムが残されており、同年に院長を退任するシュネーダーの「校長高橋と4人の主導的教師は東北学院マン(men)」というサインが誇らしげに書き込まれています。高橋は、東北学院から次々と後輩を教員として採用し、シュネーダーも同校を訪問して励ましています。その一人、大曾根源助はアメリカ視察中にヘレン・ケラーの自宅を訪ねますが、これが縁となり、ヘレン・ケラーは1937年の初来日の際に本学を訪れています。
(東北学院史資料センター 日野哲)

1・2月の水曜礼拝のお知らせ

若手音楽家たちによる独唱・重唱による賛美をおこないます。

- ◆第19回 水曜礼拝 2019年1月16日(水)
独唱・重唱による賛美
ソプラノ：松岡 多恵
(東京藝術大学大学院博士課程)
バリトン：森 翔悟
(東京藝術大学大学院修士課程修了)



- ◆第20回 水曜礼拝 2019年2月20日(水)
カンタータによる賛美
ソプラノ：金持 亜実
(東京藝術大学教育研究助手)
アルト：谷地畝晶子
(岩手大学非常勤講師)
バス：中川郁太郎
(本学特任准教授)



文部科学省私立大学研究ブランディング事業とは：

学長のリーダーシップの下、大学の特徴ある研究を基盤として、全学的な独自色を大きく打ち出す取り組みを行う私立大学に対し、施設費・装置費・設備費と経常費を一体的に支援するもので、各大学の特色化・機能強化の促進を目的としています。東北学院大学は、「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」との事業名で平成28年11月22日に採択されました。

東北学院大学研究ブランディング事業通信
第19号

2019年1月9日発行

〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1

TEL：022-264-6547

E-mail：branding@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

URL：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/theology/